

水曜日の恋人

目次

終章	十三章	十二章	十一章	十章	九章	八章	七章	六章	五章	四章	三章	二章	一章	序章
	イミテーションナイト	招待状	台風	宣言	対決	痛み	シャボン玉	嫉妬	火花	時計	ゲーム	マンホール	出逢 ^あ い	夢のかけら
295	262	243	217	197	174	150	129	109	86	72	44	30	6	4

序章 夢のかけら

「思うようにいかないのが人生だ」
いつだってそうだった。
そんなことは知ってるつもりだった。

普通に生まれて普通に育った。学校でも会社でも目立ったことなんて一度もなかった。平凡で穏やかな反面、憧れや理想は手の届かない、遙か遠くの輝きでしかなかった。

運動会では三番か四番。文化祭では裏方。合唱祭では端っこで口パクして揺れているのが関の山。好きになった男の子はいつも自分以外の可愛い子と一緒にだった。だからって別に不幸な訳じゃないと自分に言い聞かせてきた。

四年前、彼に出逢って人生は変わった。初めて望まれてヒロインになれたのだ。彼との恋はどこか密やかで秘め事めいていたけれど、逆にドラマチックでわくわくした。堅実で地味な勤め先も彼の未来を思っただけで選んだ。

やっとなんだ夢。とびきり頭がいいわけでもとびきり美人でもないけれど、すてきな人との出逢いで輝く人生。普通すぎる自分だけれど、彼となら悪くない。
そう思っていたのに。

三ヶ月前にほころび始めた彼との関係。あいた穴を繕うためにあらゆる手段を講じて東京まで来て、なのに結局崩壊した。もはや決して取り戻せない夢。砕け散ったかけらをぼんやりと見ている。

やっばり望みは叶わない。ヒロインにはなれないの？
好きだったのに。あんなに頑張ったのに。
どうして。

「そもそも、思うようにいくわけもないのが人生だ」
ずっとそう思っていた。無意識に諦めて納得していた。
でも今は。
そう言った誰かを殴ってやりたい。

初めて彼と迎えた朝は土曜日だった。

深い眠りは深海へ潜るのに似ている気がする。碧や深緑、そして黒。それらが混ざり合って溶けた中で自分が浮遊する、そんなイメージ。悪いものじゃない。逆だ。安らぐ。こういう眠りは滅多に訪れないのが悔しい。自分のことなのにどうしてコントロールできないんだろう。

凄く気持ちがいい。なんの不安もない。慰めるように髪をなでってくれる指。こんなに落ち着くのは久しぶりだ。そう、久しぶり……？

頭の中で警鐘が鳴った。本能が眼を覚ませと訴える。こういう時は従うべきだと経験からわかっている。彩芽は、いやいやながら意識を浮上させていった。眠りの海から現の空へ。

眼を開けた。まだ覚めきらない意識でとらえる白い天井と薄暗い室内。窓にかかるカーテンが強い日射しを遮断している。朝なのか昼なのか。

ぼんやりした眼が間近の腕をとらえた。五本の指がついている左腕はどう見ても自分のではない。筋肉質で頭の下に敷いてもしびれることのなさそうな腕を杖にしている。誰の？ 意識が現実と折り合わずに焦れる。

気づけば腰のあたりにも別の腕があった。ゆつたりと彩芽の腹を包むように抱え込んでいる。背中にも人肌と体温を感じる。つまりベッドの上で誰かの左腕に頭を、右腕に腹を抱えられ、背中から誰かに抱き込まれているってことだ。いやな予感、じゃなくて実感に襲われながら、ともかく現状を把握しようと彩芽はおそるおそる身体をねじった。

まず見えたのは銀のピアスがふたつだった。耳たぶに星を光らせる男にあいにく見覚えはない。無造作に額にかかる焦げ茶色の髪。通った鼻筋。長い眉に閉じたまぶた、薄目の唇。小さな黒子は思わず指でたどりたくなる。要するに整った顔だ。非常事態にも拘わらず彩芽はまぶたが開くのを期待した。人の顔は眼で決まる。どんなに綺麗な顔立ちも印象は眼次第だから。見たい。

神様のきまぐれか、いきなりまぶたが開いた。期待どおりの眼だった。月が照らす夜の海、銀の波の輝きが見えたのは錯覚だろうか。

魅入られた彩芽に現実は隕石レベルの衝撃で襲いかかってきた。

「起きたのか」

笑みを浮かべた顔が視界を覆う。唇に感触、つて……へ？ は？ あ。キス？

「きゃあああーっ！」

ようやく我に返った彩芽は相手を思いきり突き飛ばした。百メートルも離れようとする勢いだったが、ベッドの幅も長さも百メートルあるわけがなく。飛びすさつて背中から床に落ちかけたところを男は苦もなく引つ張りあげて抱き寄せた。逃げた腕の中にまた囲われたわけで、……まぬけだ。「つぶねえ。何やってんだか」

言葉ほどあわてていない、どちらかという面白がっている声だった。気づけば相手も自分も裸

だ。全身の触覚が目覚めてくる。

「やっ、は、離して」

恥ずかしいやら焦るやら逃げたいやら、まさにパニック状態。闇雲やみくもに暴れても相手はびくともしない。

「わかったって。また落ちるぞ。落ち着け」

「そんなこと言ったって」

「忘れてるのか。そんな気はしたけどな」

「は？ 何を」

「俺の顔、わかるか？」

とりあえず彩芽をシートでくるみながら男は聞いた。わかるならこんなにあわてたりしないのに。

「昨夜のこと、どこまで覚えてるんだ？」

彩芽は混乱した思考を必死で立て直そうとした。

おぼろに浮かんでくる泡のような記憶。

そう、昨夜。落ち込んでいた彩芽は職場の先輩に誘われて、初めて「ホストクラブ」なるところへ足を踏み入れたはずだった。

六月に入ってから彩芽の落ち込みは尋常ではなかった。四年越しの夢がつぶれたら誰だってそうなるだろうと思うものの、さすがに勤め先でも人目を引いていたらしい。

柚池ゆきいけ彩芽は派遣社員だ。中堅アパレル商社の経理課に所属している。まだ新米しんまいもいいところ。

東京へ出てきたのが四月。あらゆることに慣れなくて緊張した毎日。おまけに心はいつもほろほろ始めた夢の繕つくろいに飛んでいた。とはいえ勝手に飛び出してきたから親には頼れないし、預金はあるものの手をつけたくない。だから派遣に登録してすぐ仕事に就けてホッとした。気もそぞろながら早く慣れようと仕事中は必死になった。新しい勤め先は派遣社員が多く、そういう意味でも助かった。

そして二ヶ月。やっと仕事にも人にも慣れ、派遣先でも気軽に呼んでもらえ始めた頃。わずかな希望にすがっていた彩芽の夢はどうとう消えた。プライベートを仕事で出すべきじゃないとわかっ
ていても、のしかかる這はい上がれないほどの絶望感。よほど目立っていたのだろうか。可愛がつてくれる正社員の那智理恵子なちりえこに声をかけられたのだ。

「彩芽ちゃん、遊びに行かない？」

「遊びに？」

鬱うつな心をなんとかしたいのは山々やまざまだったが気が重い。そんな彩芽に理恵子は声を潜ひそめて聞いた。

「ホストクラブって興味ある？」

「ホストクラブ、ですか？」

さすが東京。まずそう思った。ホストクラブなんて田舎ではまずお目にかかれない。あったとしても普通のOLにとっては別世界で行こうなんて思えない。一体どんなところなんだろう。久しぶりに湧わいた好奇心を理恵子はしっかり読みとったようだ。

「OK、行くわね？ 金曜だし今夜がいいな。軽く食事して映画でも見て、それからね。初めてなりたいしてお金もかからないし。奢るわよ。ちよつと飲みに行くと思えばいいの。じゃ終業後に」
テキパキと決めて仕事に戻った彼女に、彩芽はもう一度感心した。理恵子は切れる。彩芽が派遣された課では男女問わず一番だ。頭が良くて美人で気さくで気つぷがよくて。「江戸っ子の美人」をそのまま体現したような。着物を着せたらきつとよく似合うだろう。

湧きあがるコンプレックスを彩芽は仕事で食い止めた。せつかくの厚意だ。職場ぐらいは楽しい方がいいし、せめてもの救いと思いたい。

終業後に理恵子と落ち合った。どうしてすぐ行かないのかと思ったが、理恵子によればそのホストクラブは開店時間かなり遅めらしい。ふたりでイタリア料理を食べたあと映画を見た。コメディで久しぶりに笑った。それからようやく目的地へ向かう。

「先輩はよく行くんですか？」

抑えようとしても顔を出す好奇心。これまで自分の周りにホストクラブの経験者はいなかったし。

「よく行くってほどじゃないけど、落ち込んだ時なんかいいのよ。何しろ美形がかしずいてチャホヤしてくれるんだから」

「やっぱり美形ですか」

「基本はね」

と理恵子は笑う。

「好みがあるから取りそろえてますって感じかな。でもこれから行くところはいろんな意味でレベ

ル高いって定評があるの。私もそう思うな。レベルって顔だけじゃないのよ」

わかるようなわからないような、でもなんだかワクワクする。鬱々自分を押し隠し、彩芽は期待の風船を精一杯膨らませた。

歓楽街の裏にある洋館みたいな建物だった。ゴージャスでシックな門構え。安っぽさなんてどこにもない。ひとりじゃ絶対入れない高級な雰囲気。彩芽は怯む。ドアを押し開いた理恵子について、気後れしながら入る。そのとたんだった。

「いらっしゃいませ」

綺麗にスーツを着こなした男性が出迎えてくれた。彩芽とさほど変わらない年頃だろうか。

「理恵子さん、お久しぶり」

「ちよつと仕事が忙しくてね。お詫びに新しいお客を連れてきたわ。初めてだった」

「いらっしゃいませ」

彼は彩芽に向かって実に見事なお辞儀をした。中世の騎士がお姫様にする礼みたいで見とれる。

「理恵子さんの連れにしてはすいぶん可愛いね」

「ケイ、それは私が可愛くないってこと？」

「失礼」

軽口の叩き合いを双方楽しんでるみたいだ。

「会社の後輩なの。このところ落ち込んでるみたいだから楽しませたいのよ。よろしくね」

「もちろん。ここでは誰でもレディでプリンセスだから」

レディ？ プリンセス？ キングやナイトもいるのかと彩芽は聞きそうになった。それくらいこころは異次元に思える。

「アキラは元気？」

「理恵子さんが来ないから拗ねてたよ」

「だと嬉しいけど」

「どうぞこちらへ。お連れのお名前は？」

答える前に理恵子が告げる。

「彩芽よ」

「この時期にびつたりの綺麗な名前だね」

ケイと呼ばれた彼は彩芽に向かって微笑んだ。花のイヤメとかん違いしたようだけど、今はあやめ違いを訂正する余裕なんてない。気分は魔法使いに杖を振られて変身したシンデレラさながら。

「あやめさん、『マンホール』へようこそ。楽しんでいただけるとはお約束しますよ」

かくしてホストクラブ『マンホール』へ彩芽が足を踏み入れたのは、金曜の夜だった。

店内はおとぎ話に出てくるお城の大広間を思わせた。ふかふかの絨毯。高い天井にシャンデリア。落ち着いた色の壁紙にはアールヌーボー調の絵がいくつか。贅沢そうなソファが一面に広がり、姫ならぬお客と、騎士ならぬホストが優雅にさざめいている。

「ふたりともこちらへ」

案内されるままにソファの間を抜けその一角に導かれた彩芽だが、自分には分不相応な気がして落ち着かない。

「せんぱい〜」

心細そうな彩芽に理恵子がカラカラと笑う。豪快だ。

「何死にそんな声出してるの。面接試験じゃないのよ。ここはクラブ。あなたはお客。お金払う側なんだから威張ってなさい」

そんなこと言われたってと思う間にひとりのホストが現れた。肩までの茶髪と甘いマスク。柔らかな微笑が印象的だ。理恵子の声まで甘くなる。

「アキラ。ごめんね、ご無沙汰して」

「忘れられたのかと思ったよ」

アキラと呼ばれた彼は差し出された理恵子の手に軽くキスしながら、茶目つ気をこめて睨んだ。ドキリとする仕草だが理恵子はあっさり流す。

「しょうがないのよ。繁忙期に入っちゃうとね。あ、この娘」

理恵子が彩芽を振り返る。うなずいたアキラの挨拶はよどみない。

「彩芽だね。『マンホール』へようこそ。俺はアキラ。理恵子のご指名だからよろしく」

この人達は毎日笑顔の訓練をしているんだろうか。魅惑的な微笑みに見惚れながらも、彩芽は聞き慣れない言葉にとまどった。

「あの、指名って？」

わからないことはざつさと聞くに限る、これは彩芽の智恵だ。

「大抵のホストクラブがそうなんだけど、お客は何度か来たあとに、店のホストの中で一番気に入ったホストを『指名』するのよ。そうするとそのホストが専属のエスコート役になるの」

「必ずその人が相手してくれるってこと？」

「基本的にはね。アキラみたいに人気があるホストだと必ずってわけにはいかないけど、それがお約束ってわけ」

理恵子の横、彩芽の斜め前に座ったアキラも説明に加わる。

「指名したホストが忙しい時は、ちゃんとヘルプが入るから」

「ヘルプ？」

「その日限りの助っ人かな。そこで別のホストとも知り合いになれるから、喜ぶ客もいるわよ」

ホストクラブにもいろいろな約束事があるんだなと感心する。

「あたしみたいに初めてだったら？」

アキラがにつこりする。目の保養だ。

「好みのホストを決めるまでは自由にできるよ。今日みたいに初めての日は特に、ホストがみんな挨拶にくる。選ぶのはお客様だから。楽しんでもらえると嬉しいよ」

しばらくしてお酒が運ばれてくると、アキラの言ったとおり、ホスト達が入れ替わり立ち替わり現れた。テルにヨウジにタカヤ、マサシにナル、それから……。一体何人いるのか見当もつかないし、こんなにたくさん覚えられない。キョロキョロしている彩芽に理恵子が耳打ちした。

「バカ正直に全員覚えなくていいのよ。好みと思ったホストだけチェック入れときなさい。今日決めなくてもいいんだから」

なるほど、とうなずいた彩芽はさらに気づいた。あくまでも「次があれば」だ。今日は理恵子と来たから入れたけれど、ひとりでここに来る勇氣なんてない。だったら今夜限り。真夏じゃなくて梅雨の夜の夢だ。ガラスの靴を持たないシンデレラ。そう思うとぐつと気が楽になった。

鬱を晴らしに遊びに来たんだから楽しめばいいのよね、うん。

気を楽にして良かったのか悪かったのか、そこから彩芽はテンションを上げた。お酒はそんなに強くないのに、ホスト達はあたりまえながら勧め上手で、ついついペースが速くなる。お酒と一緒に口もすべりだしたあたりで、また新顔が現れた。理恵子が機嫌良く迎える。

「ユウじゃない、相変わらず余裕ね」

「それは理恵子さんでしょ。相変わらずしゃっきりした美人だ」

的確な表現だと思いつながら、ユウと呼ばれたホストを彩芽は見た。酔った眼に映ったイメージは銀のオーラを放つ黒ヒョウだ。アキラとも、さつき顔を出した店のトップだというトオルとも違う。美形ってだけじゃない、隠している爪を感じさせる。興味津々の彩芽の視線もあっさり受け流す。

「君があやめ？ 『マンホール』へようこそ。俺はユウ」

みんなと同じ台詞なのに受ける印象が全然違う。微笑みは口を歪めただけで皮肉っぽく、一歩間違うと小馬鹿にするとそれそうだが、悔しいくらい魅力的だ。彼は店のナンバー2だという。

理恵子の言葉をふと思いつ出した。「レベルって顔だけじゃないのよ」。確かにそうだ。お客の扱いも

丁寧で優しいし、話もうまい。現れるホストはどれも美形だが、個性たっぷりで千差万別。その中で彩芽が一番惹かれたのが、ユウの皮肉つぼく口を歪めた笑みだったのはどうしてだったのか。

二時間後、彩芽はかなり酔っていた。お客を楽しませる彼らの話術は、彩芽など苦もなく天国にいる気分させてくれる。甘やかして慰め、持ち上げて誉めそやす。酒もすすむというものだ。

時間が遅くなるほど店内は込んできていた。増えた客から指名がかかったホストが次々と席を外す。そんな中でも理恵子はアキラという雰囲気だったと思う。

「……ねえ、お金の使い道って知ってる？」

彩芽がふと口にした問いに、たまたま隣で答えたのはユウだった。そんな簡単なこと聞くなと言いたそうな顔で。

「宝石とかブランド品買えば簡単だよ」

「残るものはいやなの」

「海外旅行は」

「ひとりじゃつままないでしょ」

「食べ歩く」

「だからひとりじゃ」

「なんでそんなに使いたいんだ？」

彩芽は黙る。理由はあった。今すぐにでもその金全部を燃やしてしまいたいほどの理由が。別のホストが挨拶に来たので話は切れた。

「へえ、可愛いね。あやめちゃんって言うんだ」

新しく加わった彼はレンと名乗った。とても優しい雰囲気でおまけに凄い美形だ。彼の背を覆って流れ落ちる黒髪。心の奥に押し込んでいた鬱が溢れ出すのがわかった。何故こんな時に。こんな楽しんでる時に思い出すの？ ううん、わかっている。あの時垣間見た彼女も流れるような黒髪だったから。とうとう彩芽は泣き声をあげた。

「せんぱーい、あたしふられたんですよ」

「え？」

少しは予想していた理由だろうが、突然泣きついてきた彩芽に理恵子もびっくりしている。自分でもやめときなさいと思ったが舌は勝手に言葉を紡ぐ。

「四年つきあってた人に」

「四年も？ あなたいくつだっけ」

「ユウがちらっとこつちを見たような気がした。」

「二十二です」

「十八からずっと？」

アキラも驚いている。

「高校三年の時に知り合って。結婚する約束もしてたのに」

「婚約ってこと？」

「親は知らないんだけど」

と彩芽は口ごもる。

「なのに彼、急にいなくなつて。探し当てたら別の彼女がいて別れてくれたって」「えー?」

レンが言葉を探している。どう聞いても騙された女だろうな。そんな彩芽の思考におつかぶせるように冷たく響いた声。

「永すぎた春の果てに捨てられたつてわけだ」

人を氷河期へと突き落とさんばかりの台詞だ。その場にいた全員の視線がユウに集中した。彩芽の顔から血の気が引く。この人いつもこうなんだろうか。

「ユウ、そんな言い方は失礼だよ」

レンが眉を上げ、たしなめた。

「言葉を飾ってどうする。本人が一番わかっているさ」

確かに否定はしないけど、だからつて。

「わかっているなら余計に言われたくないものよ」

彩芽の気持ちを代弁するかのようには理恵子が睨んでもお構いなしだ。苛立ちで彩芽の唇が尖る。

「慰めるのが普通でしょ」

「ろくでもない男だなんて?」

苛めっ子みたいな口調がどうしてこうも魅力的なんだか。

「……彼の悪口言わないでよ」

「ふられてまだ未練なんだ」

口を歪めたいやな笑い方が棘のように彩芽の胸に刺さる。

「四年もつきあつたらしようがないわよ」

理恵子が懸命に庇ってくれるが、ユウは一向に退かない。

「引きずるよりさつさと新しい恋でもすれば。恋愛は長さじゃない。心が全てでもないだろう」

「新しい恋? 氷河期ブリザードな気分のみっ直中で恋なんてできると思う?」

「ブリザード脱出なんてすぐだ。相手を好きじゃなくてもいいし」

意味がちつともわからなかった。困惑する彩芽に彼は挑み続ける。

「必ずしも気持ちが必要ないつてことさ」

「好きにならなきゃ始まらないでしょ」

「そうとは限らないぜ。もつと簡単な方法もある」

彩芽はやけになつていた。お酒が全身の血管を巡つてもいた。

「そこまで言うならその、簡単な方法つての教えてよ」

わずかに残つた気力で睨んだ。一応客なんだから答えは聞かせて欲しい。笑つたユウの眼は何か企んでるに違ひなかつたけれど、低い柔らかな声はビロードみたいに気持ちよくて。

「いいぜ。身体から始めてみるか? 新しい恋を」

そこで記憶は切れていた。

戻ってきた現実。思い出した。この人はホストクラブ『マンホール』のナンバー2、ユウだ。思い出したけれどこの状況は、何？ 彩芽の焦りは減るどころか三倍、四倍増しになる。

どこだかわからないがここはホテルだろう。高そうなダブルベッド。ダブルなんて初めて、じゃなくて、彼と自分が糸まとわぬ姿でそこにいるわけは？ どうしよう、どうなってるの。

理性は現実を理解しようとしているのに、感情は激しく抵抗している。何より眼のやり場がなかった。だって裸だ。

彩芽の表情を読んでいたユウは、彼女が思い出せることは思い出したと判断したらしく再び笑った。昨夜の記憶と同じいやな笑い方が彩芽の気持ちをささくれ立たせる。

「現状認識、した？」

死にかけて魚みたいにパクパクと空気を求めていた彩芽の口から、やっと言葉が飛び出す。

「してないわよ！ なんてあたしがあなたと、それも素っ裸なの！」

くつくつくと彼の肩が揺れた。色気も素っ気もないのはわかっているが、こんな状況、受け入れられない。自分は失恋ドツボ、ブリザードで凍死寸前だったのに。

「どこまで記憶にあるんだ」

ユウはシャツに覆われた彩芽をつかまえたまま、暢気のんきに煙草を吸い始める。それが様になるから困る。細身なのに力のある腕の筋肉すら、色っぽくて顔がほてる。なんとか逃れようとしても無駄な抵抗、となるとおとなしく答えるしかない。

「ブリザードの脱出方法を聞いたあたりまで」

「なんだ、覚えてるじゃん。だからこうなったわけ」

「……は？」

三段論法どころじゃない。今のは百段ずつ飛ばしてる。その「だから」で、ここから月までひとつとびだ。論理が飛躍しすぎて説明になってない。

「脱出方法が、これ？ これって」

「セックス」

切れ長の眼がニヤツと細くなる。聞くのもいまさらだが。

「……したの？」

「全然覚えてないのか？ 結構燃えてたくせに」

「やつ、やめてええー！」

彩芽は再びシャツをかぶって突っ伏した。夢であって欲しかった。夢じゃないことはわかっている。でも。

服を着たい。でなきゃ話もできないという彩芽の懇願こんがんにどうにか離れてくれたユウだが、ベッドを下りる彩芽から楽しげな視線を外そうとしなかった。

「あ、あのね、あっち向いてよ」

「いまさら？ 服ならその椅子の上」

「わかったから」

いまさらと言われても、彩芽にすれば彼はまだ見ず知らずの男と同じだ。許容量を超えて飲んじやいけない。日本海溝並みに深く反省しながら睨みつける。やれやれといった風情でユウが背中を向けるのを待つて、服を抱え込んだ彩芽はダツシユでバスルームへ飛び込んだ。

ついでにシャワーを浴びようとして、鏡に映った自分の裸に思わず釘付けになった。ぐえつと喉で蛙が鳴いたような声があがる。胸に腹に腰に、振り返ると背中にまで鮮やかな赤い痕がいくつも一瞬で沸騰した彩芽の頭に、靄のような記憶が甦った。細くて長い指。大きな手。サラサラの髪の毛の感触。それから唇。それらが認めたくない事実を彼女につきつけ、さらに散らばった赤い印が駄目押しする。

怒っていいはず。つていか本来泣くべきところじゃない？ なのに。残っているのは砂糖菓子みたいな後味ばかりだなんてどうかしてる。

なんとか服を着た。幸い見えるところに痕は残ってないようだ。意図的だとしても彩芽が太刀打ちできるレベルではない。泣いてもいいですかと誰かにすがりたい。

バスルームを出ると彼も着替えていた。ジーンズなのは何故だろう。昨夜はスーツだったのに。そりゃあ白いシャツも似合うけど。椅子に座って煙草をくゆらせる横顔。ピアスが光った。最初に眼についた銀のピアスは黒ヒヨウの牙みたいで綺麗だが、そう思うのも悔しい。ユウは彩芽を見てニツと口の端を上げた。

「いくつあった」

「え？」

「数えなかったか？」

「あ、あ、あなたねえええ」

確信犯だ。とつさに枕をつかんだ彩芽に、もう一度ユウが投げた言葉。

「見る。ブリザード脱出も簡単だろ」

手が止まった。

「今のあなたがブリザードの中なら、常夏の島もブリザードだつて」

そう言いながらまた新しい煙草に火をつける彼。彩芽は井戸をのぞき込むように、自分の感情をまじまじと見直した。決して立ち直ってない。痛みが消えたわけでもない。でもあの鬱、どうしようもなかったマイナスの塊が消えているのも確かだった。そんなバカな、ほんとにこれが脱出法？ 出逢ったばかりの男と寝ることが？ 渦巻く疑問をどういっわけか彼は正確に読みとっているらしい。

「言つたら？ 身体から始めてみればいいって」

意味がわからない。身体から、何を。

「あんたは四年も大事に温めてたものを無くして、氷河期ブリザード状態だったよな。でもさ、恋愛は長さや心で決まるとも限らないだろ」

「……好きだつていう気持ちよりも？」

「身体から始めるつてことで。相性はいいみたいだぜ、あんたと俺。どう？」

めまいがした。ここは日本、相手は日本人で言葉も日本語なのに、こうも理解できない言葉があ

るとは。純真無垢に生きてきたつもりはないけれど、少なくとも好きな相手がいて、それを第一に行動してきたこの四年間。大事なのは気持ち、そう信じてたのに。

他でもないその好きだった人に世界をひっくり返された上、大きな鬱^{うつ}に呑み込まれ溺^{おぼ}れかけていた自分が、身体から始めようなどと涼しい顔で吐き出逢^{であ}ったばかりのホストとのセックスで、鬱から抜け出そうとしているなんて。曲がりなりにも二十二年、自分の中でつちかかってきたものは何だったのか。情けなさすぎる。

こつちを窺^{うかが}っていたユウが煙草をもみ消したのにも気づかなかった。自分の葛藤に意識を埋没させていた彩芽は、抱きしめられてぎよっとする。なんでまた？ 耳元に響くのは覚えのあるビロロドのような声。

「どうしようもなく真面目にやってきたんだろ、あんた。それでうまくいかなかったんだから、今度は不真面目にやってみれば？ なんとかなるもんだぜ」

意地悪でも皮肉でもない、諭すような声。いやなはずの抱擁^{ほうよう}が心地いいなんて。

「不真面目にやるって、誰とでも寝るってことなの？」

口調がきついのは泣きそうなせいだ。

「いや、ゲーム」

「ゲーム？」

彼の言葉はやっぱ理解できない。

「気持ちじゃなくて、身体から恋を始められるかどうか、試してみれば？」

「無理だと思う」

「ゲームだと思えば、勝っても負けても楽しめるだろ」

腕の中から見上げると、ユウは不敵な笑みを浮かべている。怖いくらい強気な。

「考えるよりやってみる方が早いぜ。とりあえずイントロに入っちゃったしな。はいこれ」

差し出されたのは名刺だ。『クラブ マンホール 天川^{てんがわ} 右生^{ゆうせい}』とある。

「そこにあるのが俺のケータイの番号。先を続ける気になったら連絡しろよ。改めて説明してやる。もちろんやらなくても構わない。あんた次第」

顎^{あご}をつかみ唐突にキスを落とすと、啞然とする彩芽を後目^{しりめ}に彼は扉を開け、するりと部屋の外へと消えていく。

「ホテル代はいらぬ。縁があつたらまた、な」

ドアが閉まった。取り残された彩芽ときたら、頭は疑問符^{くえんごう}の渦、身体には赤い痕^{あと}、唇にはキスの感触。全て彼の置きみやげだ。確かに鬱^{うつ}からは掬^{すく}い上げられたのかもしれないが、実はもつとんでもないところへ放り込まれただけの気もする。

混沌^{こんたん}の中で彩芽は戦闘態勢に入っていた。黒ヒョウみたいなホストの誘いに乗りたい、そう思っている自分自身と。

月曜日は雨だった。会社への道すがら、眼に留まった紫陽花^{あじさい}が自分の心のように思える。あまりにも定まらない色模様に舌打ちしたくなるほどだ。

出勤した彩芽は真つ先に理恵子を探した。いつも早い彼女はすでに自分の机で仕事の準備している。

「先輩、こないだは」

「彩芽ちゃん？」

理恵子は彩芽を見るや大急ぎでお手洗いに連れ込んだ。彼女にしては珍しいくらいあわてている、そのわけは。

「あのあとどうした？一緒に帰ろうとしたんだけど、あなたちつとも聞かなくて」

「……先輩、あのお」

彩芽はおそろおそろ問う。

「あたし、半分くらいしか覚えてないんですよ。一体どうして……あなつたんでしよう？」

情けなさそうな彩芽の顔を見て、理恵子は額を押さえた。頭が痛くなったのかもしれない。

「やっぱり無理にでも連れて帰るんだつたかな」

「せんばい〜」

「ああ鳴っちゃった。お昼一緒に食べよう、その時話すから」

始業チャイムが流れた以上、他に術すくはなかった。

待ちかねた昼休み、オフィスのエレベーターからどつと吐き出される人波に彩芽と理恵子も混じった。傘の花が咲き乱れている。雨の日のオフィス街もこの時間だけは華やかだ。理恵子の希

望で、お昼にしては高めのレストランを選んだ。その分ゆっくり話せる。

「途中までは覚えてるんです。右生と口論したあたりまで」

モグモグ口を動かしながら話す彩芽に、理恵子のため息をつく。

「口論ね。あれはユウが指名で呼ばれて、席を外したから中断したのよ。でもあなつたら、ガンガン飛ばして、帰ろうとしなくて」

記憶が途切れたあとも飲んでたのか。そんなに強くもないのに、とフォークの先の鶏肉をぎろつと睨んでみる。

「もともと落ち込んでたし。憂さ晴らしならいいかって止めなかったの。そしたら看板まで居座っちゃって」

初めてのホストクラブで？ ああ、反省の深さをマリアナ海溝レベルまで修正しよう。この大バカ者。睨まれて恐れをなしたようにトマトソースを滴したらせる鶏肉を一呑みにする。理恵子の話は続く。

「ホストクラブってホストの帰りをみんな狙ってるのよね。お持ち帰り目当て」

それはつまり？ 彩芽のナイフとフォークが再び止まり、顔が真つ赤になった。

「ユウとかアキラは人気があるからなかなかつかまらないんだけど、人気あるから逆に本人次第なのよ。新人みたいに言いなりでもなく」

ホストも大変なんだなど同情、してる場合じゃなかった。彩芽は少々自棄やけ気味で、付け合わせの野菜をぐさぐさと刺しては口に放り込んでいく。

「なのに、ユウつたら私達のとこに来て言つたわけ。こいつは俺が持ち帰るからつて」

「……はあ？」

開いた口がふさがらなかった。なんだそりゃ。こつちの意思は無視か。

「閉店まで居たお客の中にはユウ目当てがそりゃあ多かったわ。常連だっていたのよ？　なのにあなとききたら、ブリザードの簡単な脱出法教えてやるよって言われて、行くう、って即答よ」

差し伸べられた彼の手にあっさりつかまったという。子どもみたいに。

「あんまり素直だから、止め損なっちゃったのよ」

すでに食後のコーヒーを待つばかりだったテーブルに、彩芽はべたりと突っ伏した。狼に飛びつく赤ずきんちゃんの図だったというわけだ。食べてくださいと言わんばかりじゃないの。

「ごめん。私も珍しくアキラがいいよって言うから、つい」

理恵子は両手を合わせて謝るけれど、彼女にだって都合はある。酔ってるとはいえ、それほどはつきり意思表示されたら止められまい。

「先輩のせいじゃないですよ」

はつきり言つて自業自得。とはいえ、後悔で深い海溝の底まで沈んでいきそうだ。テーブルの向こうから理恵子のがぞき込んでくる。

「やっぱりそうだった？」

「いまさら聞きますか」

「……そう、よねえ」

ゆっくりと椅子に寄りかかりながら、理恵子はどう言おうかと迷っているようにみえる。

「珍しいのよ、ユウが自分から相手するのって。良くも悪くも淡泊で、お客に逆らったりきついこと言ったりするのを私は見たことなかったの。あ、いい？」

喫煙席だというのに彩芽に断り、理恵子が煙草と一緒に取り出したライターは細身の銀色円筒形だ。「私も何度か看板まで居たことあるけど、ユウだったらいつの間にかなくなっちゃうことも多くって。ただでさえ人気があるから、帰りにつかまることなんて滅多にないみたいよ。」

ろうそくみたいな筒の先の火でつける煙草。紫煙がゆらゆら立ち上る。

「アキラの話だと、ホスト同士でははつきりものを言うらしいけどね」

「あたしがよほど癪に障ったとか、苛めたかったってことですか？」
慥然とした彩芽の問いに、理恵子は首を振った。

「そうじゃなくて。あれがほんとの彼なのかなって」

「ほんとの？」

「素顔。チラッとだけどね」

どういう意味かと聞き返す前に、コーヒーとデザートが運ばれて話はそれきりになった。白いお皿に盛り付けられたチョコケーキとカラフルなマカロンを味わいながら、雑談のかたわら彩芽は考え続けた。

彼の言ったゲームとは何だろう。どうしてあたしに構ったんだらう。

彼は一体、どういう人なんだらう？

問いが積もるばかりで答えはひとつも見つからなかった。

土曜日、目が覚めたのは夕方だった。

週末の歓楽街はにぎやかだ。なんだかんだいっても平日より週末に遊びたいというのが常人の思考で、ホストクラブも例外ではない。にも拘わらずギリギリの時間に店に入った右生に、声をかけてきたのはケイだ。

「珍しいね、あなたがすべり込みとは。キャッチでもしてた？」

「……俺がするように見えるか？」

「見えないな。必要だった頃もやらなかったよね。態度でかくて」

嫌味のない笑いをクスクスと漏らすケイは、ホストの割に人がいい。上にはなかなか上つていけないが、それを苦にするタイプでもない。性格の可愛さですっかり顧客もつかんでいて、上らないが下がりもしないマイペース派だ。右生より年下だがウマも合う。

「トオルの客が『枝』を連れてくるらしいよ。新人達がどよめいてる」

指名客に連れてこられて、指名ホストが定まっていな客を『枝』と呼ぶ。つまり新規の客獲得のチャンスだ。

「最近、景気悪いからな」

「ユウもちょっとは本気出せばいいのに。トオルくらい抜けるでしょ。その気があれば」

「その気がない奴はトップに向かない。俺は現状キープで満足さ」

さらっと流した右生はネクタイを締め、髪をかき上げた。

「そろそろ行こうぜ」

開店時間が迫っていた。

『マンホール』はこの界限では名の売れたホストクラブだ。メンツも粒ぞろい。お客をあくまでも淑女として遊ばせてくれると定評がある。遊びに来る客も落ちるお金もそれなりのレベルの高さだ。今、店のトップはトオル。めきめきと台頭した彼はつい三ヶ月前、それまでトップだったアキラを追い落としした。以来トップを維持している。長身でがっしりした体格に短髪。構えがちなブランドスーツをサラッと着こなす優雅な身のこなしと素っ気ない態度、それでいて甘い台詞をささやくのが持ち味だ。

トオルに追われたアキラは、対照的に綺麗な茶髪と甘いマスク。柔らかな微笑で客を魅了する。聞き上手で、客をにぎやかにするのが得意だ。トップから追い落とされればナンバー2になるのが普通だが、アキラは三位に甘んじている。『マンホール』には二年間も二位をキープしている男がいたから。

それが右生だ。店では「ユウ」とカタカナで通すのはみんなと同じ。だが彼の存在は、店のホストの誰にとっても驚異だった。がむしやらさがなく欲や押しもない。そのくせ抜け目もない。トップだったアキラが落ちても二位の座は渡さないあたりにそれは窺える。余裕があるのだ。

長身で、クセがあるのにサラツとした髪。場合によつては酷薄こくはくそうに見える目つき。歪めるように笑う口元。ホストだから媚こびを売らないわけではないが、やりたくないことはやらない。やりたいうようにしかやつてないようで、しつかり客をつかんでいるから不思議だ。右生が本気になればトップもとれるだろう。誰もがそう思っているが、彼にその気がないのも知っている。上昇志向の強い奴が集まるこんな場所でのらりくらりと泳いでいる右生は、多くのホストにとつて目の上のたんこぶだった。実力主義の世界だから誰も口に出さないだけだ。

トオルとユウとアキラ。この三人が今の『マンホール』の看板だ。彼らを含めて『ナイト』と呼ばれるランキング十位までの強者つよもの。その下の中堅、さらに成り上がりを夢見る新人も加わつて、訪れる淑女を魅惑の微笑みで迎えてくれる。

午後十時。店内に灯あかりがともると、ケイの情報どおり、トオルの指名客が初めての客を連れてきた。あつという間にホスト達は戦闘態勢だ。それはそうだろう。大抵のホストクラブは指名制をとる。客は何度か来たあとに、一番気に入ったホストを自分のその店でのエスコート役に決めるのだ。以後、来店たびにそのホストへ指名料が入る。一度決めたらまず代えることはできない。ホストの変更はホスト自身の稼ぎやプライドと密接に関わるから。故にホストは指名を取るため、あらゆる努力をすることになる。初めての客はなんとしても獲得したい。ホストクラブへ行つた客が下にもおかぬお姫様扱いをされたあげくはまつてしまうのは、指名制における彼らの闘たたかいが原因だ。ホストクラブの罫といえるかもしれない。

自分の指名客についていたユウが控え室に戻つたら、トオルのところにヘルプでついていたケイがのぞいた。雑談ついでに聞いてみる。

「どうだ? 『枝』の客は」

「まあ、普通かな。ホステスらしいから狙い目ではあるね。あなたもあとで顔出しておいでよ」

「トオルがうるさい」

「関係ないよ。挨拶は常識」

ケイの、顔に似合わぬシビアな口調に右生が苦笑する。こういうところが面白い奴だよな。

「あとでな」

体のあいた右生が他のヘルプに代わつてトオル達のテーブルについたのは、それから十分後だった。初めての客には店中のホストが顔を見せに来ることになっているから、トオルも顔をしかめこそすれ何も言わない。座りながら右生は決まり文句の挨拶を唱える。

「ようこそ『マンホール』へ。俺はユウ。よろしく」

こんなしゃべり方が許されるのは右生ならではだろう。客にはもうちょっとかしづくようにと、店からは要求されているのだが。

「ラッキー。私、あなたとお話したかったの。さつきからかっこいいなって」

はしゃぐ客を、なるほど扱いやすそうだと右生が値踏みする。こういうタイプは乗せやすい。トオルが右生を軽く睨む。反対側にいたアキラがニヤツとする。トップ3は駆け引きしながら微妙な均衡を保っている。

「名前は何?」

「早智子です」

「リサちゃんの同僚には見えないね。リサちゃんが大人っぽいからかな」

「あら、ありがとう。でも慣れてないだけよ、きつと」

トオルの指名客、リサはすまして微笑んでいる。彼女もホステスだが、あっさりした性格はホストに好まれやすい性格といえる。トオルの今のお気に入りだ。それから約一時間、彼女らの席は入れ替わり立ち替わり挨拶に来るホスト達でにぎわった。早智子はすっかりその雰囲気気が気に入ったようで、彼らに携帯番号を聞かれると困ったフリをしつつ教えてやったりしていた。右生が途中で指名客と呼ばれ、席を外した間に彼女達は腰を上げた。

「今日は早智子を連れてきただけだから。また遊びに来るわ」

リサが甘えるように言うと、営業スマイルでトオルが応える。

「待ってる」

「楽しんでもらえたのかな？」

出口へ向かう通路で、右生がひよいと早智子をのぞきこんだ。早智子が眼を輝かせる。

「楽しかった。思ったよりお金つかからないのね」

「正直だね。じゃ忠告しとくけど、こんなに安いのは初回だけだから。といつてもうちは明朗会計だし、二、三万あれば結構遊べる。気に入ったならまた来いよ。楽しみにしてる」

こっちも営業スマイルだが、早智子はボーっとしながら真つ赤になっている。

「早智子、行くわよ」

リサの呼ぶ声に彼女はあわてて出ていった。

「さすが。あれはハマッタね、落とすつもりもないのに」

いつの間にかケイが後ろで笑っている。

「人のこと言えないな。おまえも全然人の上に行こうって気がないじゃん」

右生があきれたように言う。

「そうでもないけどね。あなたと争うようなバカはしないよ」

「やれやれ」

「余裕じゃないか？」

と、トオルが皮肉な視線を流して通り過ぎる。アキラはすでに自分の指名客の相手をしていた。店内はいつでも火花が散っている。それがまたホストを駆り立て、客へのサービスにつながり、客をさらにホストに執着させる。ホストクラブはどこもこういう展開なのだが、ここはそれがより優雅に、ハイレベルに行われているのが魅力と言えた。

『マンホール』へようこそ

歓迎の挨拶に迎えられたその客は、場をぱつと華やかにし、大いに注目を浴びた。

「右生を」

「了解です」

最敬礼しながら受けた指名は瞬時に伝わる。忙しさにも拘かかわらず三分後には右生は彼女の隣に居

た。そつけない口調で、だが親しげに声をかける。

「久々じゃん」

「忙しかったのよ」

「彼氏でもできた？」

「出張ばかりで家にも帰れなかったわ」

「そりやお疲れ」

「そうよ。慰めて頂戴」

「女王様のご所望じゃ断れない」

右生の差し出すグラスを受け取るのは、栗色の髪をうねらせた魅惑的な女性だ。

「遼子さん、ようこそ」

「しばらくだね」

「逢いたかったよ」

自分の指名客でもないのに、砂糖に群がる蟻のごとくやってくるホスト達を、鷹揚に彼女は迎える。

「みんな、元気だった？ キングはいないの？ しょうがないわね、任せっぱなしで」

周囲から注がれる羨望も嫉妬も一向に気にしない。たとえ指名ホストが忙しくてその場になくてもテーブルでいくつもの注文を入れて、本来はあり得ないがヘルプのホストへも色をつけてやる。

彼女を筆頭にそんな博愛主義的常連が何人もいるのがこの店の強みで力だ。

そして午前六時、朝の光が溢れる時間に『マンホール』の灯は落ちるのであった。

電話が来たのは火曜日だった。

閉め切つてあるカーテンの隙間から、暗い室内に光が刺さる。蛇が鎌首をもたげるとような姿勢でそれを眺めていた右生はくわえていた煙草をもみ消した。眠る彼女の横から抜け出し、シャワーを浴びて着替える。音を立てない慣れた仕草だが、そのタイミングで彼女が眼を覚ますのもいつものとおり。

「もうお昼？」

「ああ。帰る」

「近々誰かの誕生日じゃなかった？ トオル？」

ウェーブのかかった栗色の髪をかき上げ、毛布からのぞく豊かな胸を隠そうともしない彼女の

「たぶん」

なんとも気の乗らない返事を受け止め、彼女がフツと笑う。

「なんだよ」

「いい加減に自分をどうするのか、少しは考えれば？」

「どういう意味だ」

「今のままで満足なの？」

「なんだよ。トップをめざせとか？」

右生が口の端を歪めて笑う。

「それもあるけど……いいわ。このままで文句があるわけじゃないし」
「ならいいだろ」

言い切る口調が少し強い。

「またな」

「ええ」

あつさり向けられた背中。彼女の微笑はドアが閉まってから少し翳^{かげ}った。

「つかまらないわね。誰にも」

小さくつぶやくと、彼女はもう一度毛布をかぶって横たわる。さつきまでそこにいた彼の姿を思い浮かべながら、シーツに指をすべらせて眼を閉じた。

二重セキュリティの高層マンションを飛び出した右生は太陽を睨^{にら}んだ。なんでこんなに天気がいんだか。左右を眺めて気分が右へ折れた。どっちへ行っても同じ。繰り返して過ぎていく毎日。特に文句もないが期待感もない。喜びも悲しみもどこかへ置いてきたようだ。

小腹が空いた。コンビニでサンドイッチを買って、近くの公園で食べることにする。広くて木陰も多いここは、昼食に訪れたOLやサラリーマンでにぎわっている。ベンチはいっぱいだから、奥まった場所の植え込みの蔭^{かげ}に座り、サンドイッチをかじって炭酸飲料で流し込んだ。味なんてどうでもいい、詰めるだけ。そんな食べ方だから速攻で終わる。食べるよりもほどゆつたりと時間をかけて煙草を吸いながら、宙を見上げた。

まだ梅雨は明けてないはずなのに、仁義を知らない太陽が夏の刃^{やいば}を剥^むいている。日射しは苦手だ。鬱陶^{うつとう}しい。気づけば世間のランチタイムを過ぎていた。公園は人の波も引いて、無駄な空間だけがたつぷり残っている。そこに似合う自分も無駄に思えて腰を上げた。

自室に帰り着くと冷蔵庫からミネラルウォーターを取り出す。ごくごく喉^{のど}を鳴らしてから、そのままベッドに身を投げ出した。空のペットボトルは床に落ちるだけ。夜までの時間は眠^{むさぼ}りを貪^{むさぼ}ることに決めて、ずぶずぶと意識を沈み込ませた。

携帯の音で右生は目覚めた。店からじゃない。誰だ？ ぼうつとした頭でとりあえず出てみる。

「もしもし」

『あ、あのっ』

細い女の子の声だ。つながらない思考回路。

『あなた、右生？』

どこかでキャッチした子だろうか。聞き覚えがない。わからなければ聞いてみるだけだ。

「誰」

『あ、やめ』

あやめ？ あやめ。

……「あやめ」か。

目が覚めた。頭の中に埋もれていた名前を掘り出して砂を払う。本当に連絡がくるとはね。

『覚えてないんだ？』

声は静かに怒りを帯び始めている。

「いや。かけてきてくれたのが意外でさ。ゲームする気になったんだ？」

『ま、まだよ。こないだのあなたの説明じゃ何もわからないんだもの』

話を通じたのはいいが早合点されても困る。そんな焦りが声から読みとれる。

「で？」

右生は立ち上がりながら促す。

『もう少しちゃんと説明して欲しいんだけど。駄目？』

「いいよ。店に来るなら」

『お店に？』

彼女の唸る気配にもお構いなしに続ける。

「当然。連絡くれたつてことは興味あるんだろ？ 鬱は抜けたんだし」

うっと相手が口ごもる。携帯の向こうで赤くなってるんだらうか。面白い奴。

「いつ来る？」

『え？ あ。……いつならいいの？』

「そりやお客さんなんだからそっちの都合次第だけど、水曜日がベストだね」

『明日？』

「客が少なめだから。俺の自由が利きやすいし、それに」

違和感を覚えた右生は言葉を送切れさせた。内部の事情を聞かせるなんて、これじゃ客じゃなく
て身内にしゃべってるみたいだ。いくらゲームの相手とはいえ。

『……わかった、明日行く』

「OK」

それで切ってしまったのは面倒な気がしたから。人と話すのを好まない右生だ。それでよくホス
トが勤まるなど言われるが、しゃべればいいというものでもない。自己主張が強い奴ばかりの中で、
逆にそれほど押しも欲も出そうとしない右生を好む客も多い。

ふっと時計に落ちた視線。

「やっべえ。遅刻する」

遅刻はそのまま給料に響く。結構うるさく言われる。あわててシャワーを浴びに走った。キング
に話を通さなきゃなと思った。

『マンホール』のオーナー兼支配人は「キング」と呼ばれている。

浮き沈みの激しい繁華街ですでに十年、店を高いレベルで維持してきたのは称賛に値すること
であり、いろいろな意味で名の通った男だ。

店のホストの誰よりも背が高く、しなやかな体つき。年齢不詳、噂ではまだ四十かそこらとか。
外すことのないサングラスと短いひげがトレードマーク。凶太さと華麗さが同居する不思議な魅力。
今でもホストを差し置いて、キング目当てにやってくる客がいるくらいだ。

焦った割に余裕を持って店に入った右生は、仕度をすませるとキングの部屋を訪れた。低い響く声がノックに答える。

「右生か。入れ」

「失礼します」

部屋の中はシンプルだが、極上の家具類が並んでいる。それがキングらしい。「どうした」

「悪いけど、またゲームを始めるかもしれない」

ソファに座りながら話しかける右生に、パソコンで帳簿をチェックしていたキングの、マウスを動かしていた手が止まった。サングラスを通して尚強さがわかるまなざしが向けられる。

『『ラバー』がいたのか?』

「明日、来てみないとわからないけどな」

どこかいい加減な口調の右生を鼻で笑って、また画面に戻る。

「四ヶ月、五ヶ月ぶりか? もうやらないのかと思ってたぞ」

「そのつもりだったんだ。ついで」

「つい?」

「バカな奴がいたから」

バカは自分だと言っているようにも聞こえる。

「まあいい。明日来るんだな?」

「あやめって娘。二度目だ」

「わかった。自信はあるんだろうな」

「負けたことあったっけ」

「ゲームが始まると聞いたら、おまえの客がまたうるさくなる」

時計を見上げて右生は立ち上がった。

「彼女がのつてくればの話。よろしく」

右生が部屋を出てから、キングはひとりごちた。

「負けてわかることもあるんだが。今度は一体どんな娘やら」

サングラスに隠れた視線の先は右生の消えたドア。そこに小さく開いている窓はマジックミラーで店内が見える。キングの思考をよそに、準備に追われ、忙しく歩き回るホスト達。開店に向け『マンホール』には活気が溢れていた。

再び逢ったのは水曜日だった。

『マンホール』は他の曜日に比べると人が少なく、ホスト達もどことなくのんびりまったりしている。そこへレディ到着の知らせが入る。案内されて来たのは彩芽だ。

ひとりで再びここを訪れるなんて思ってもみなかった。こないだは夢のような場所に見えたが、改めて向き合ってもやっぱりここは掛け値なしの豪華さだ。ソファ。絨毯。壁紙。照明。さりげなく使われている全てが高級品に違いない。

「二度目ですね。来てくださったって嬉しいですよ」

案内してくれた彼は確かタカヤという名だったと思う。

「指名はまだでしたね」

「えっとその。右生を呼んで欲しくて」

彩芽の言葉にタカヤが動きを止めた。

「ユウ？」

「ええ」

「あなたは……『ウエンズデーラバー』？」

「は？」

何を聞かれたのかわからない。

「違うよな、ピアスだって」

口ごもりながらタカヤが顔を赤らめる。

「失礼しました。ユウですね。お待ち下さい」

彩芽を席へ案内してそそくさと去っていったタカヤの言葉が気になった。『ウエンズデーラバー』。そのまま訳すと「水曜日の恋人」。どういう意味だろう。そういえば今日は水曜日だけど。

ひとりで残されて緊張しながら考えていたら、いつの間にか目の前に現れた人。絨毯だから足音が聞こえなかったのだと気づく。こないだの朝以来、彩芽の脳裏に焼き付いた顔。

「ようこそ、『マンホール』へ」

にっこり微笑む右生はいつぞやの夢の続きを思わせたが、彼の隣にもうひとり。右生より背の高い男性がいた。ずっと大人の雰囲気。でもどこか似てる気もする。

「紹介するよ。このオーナー兼支配人。キング」

キング？ 眼を丸くして見上げる彩芽の手を取ると、サングラスの彼は腰を屈め、優雅にその甲に口づける。驚きと恥ずかしさで真っ赤になった彩芽を見て、キングは愛嬌のある口元をほころばせた。

「ようこそ、彩芽さん。二度目だそうですね。私は留守だったようで失礼しました。またおいでくださいって嬉しいですよ」

「あ、い、いえ」

「彼ど、ゲームをするとか？」

ギクツとする。

「それは、まだ」

「まあ、ゆっくり考えて。彼どのゲームは難しいですから」

その笑みは謎めいている。

「火傷やけどしないように」

そう言うときキングは優雅に会釈して行ってしまった。隣に座った右生を、彩芽は改めて見直す。

逢あうのは三度目だ。最初の夜と次の朝、そして今夜。印象は変わらない。銀のオーラを放つ黒ヒヨウ。耳のピアスが星。

「来ないかと思ってたよ」

「やめようって何度も思ってたんだけど」

「でも来たんだ？ 別によかったのに」

暗あんにやめると言われているようだ。さっきのキングの口振りが気になる。

「そんなに凄いゲームなの？」

「みんなには『ウエンズデーラバー』って呼ばれてる」

さっき、タカヤが漏らしたのと同じ言葉だった。

「ゲームの名前で、ゲームをやっている間の君の呼び名だ」

右生のしなやかな長い指がゆっくりと水割りを作る。その手に彩芽の視線が吸い寄せられる。

「まず。ゲームだから勝ち負けがある。当然お互いに賭けるものがある」

しつかりしなさいと自分を叱しつ咤たし、彩芽は身構えた。

「こっちが賭けるのは、まあホストクラブだから。このクラブでの指名権と俺自身かな」

「どいう……」

「これから三ヶ月の間、料金はもらわない。君が勝てば結果としてタダで『マンホール』で遊べたことになる。俺を相手に」

そんなこと考えもしなかった。彩芽の眼が文字どおり丸くなる。

「君が賭けるのは君自身と、君のお金」

「……は？」

「持つてるんだろ、六百万」

ギョツとした。確かにそのとおりだけど、なんで知ってるの？ 彩芽の顔色を読んで彼が薄笑いする。

「ほんとに覚えてないんだな。自分で言ったんだぜ、この前」

最初に来た夜、たまたま隣が右生だけになった時に彩芽はしゃべったらしい。自分の秘密を。

『あたしねー。お金持ちなんだよ』

『へえ。いいとこのお嬢さん？』

右生は面白がって聞いたとか。

『ううん。あたしが貯めたの。へへー』
『お金持ちって言うほど貯めたのか?』

『六百万』

さすがに右生の眼が光ったかもしれない。覚えてないけれど。

『何年で?』

『四年。親元にいたからねー』

『凄いな。貯めるのが趣味とか?』

『まさかあ。自分のためだったら無理だったよ』

『ふーん、彼のためか』

そんなことをペラペラ話すなんて、ホントにバカだと彩芽は自分に舌打ちする。同時にようやくわかった気がした。あの夜、右生が自分からんだわけ。それからゲームに誘うわけ。単純なことだ。お金を持つてるから。その事実は彩芽を落ち着かせると共に、同じくらいがっかりさせた。感情が顔に出たんだろう。右生が言葉を足してくる。

「早まるなよ。別に無理矢理お金を巻き上げるわけじゃない。君が勝てば、お金はそのまま君のものだ」

疑わしげな彩芽に右生は苦笑する。

「キングが約束すれば、その辺の警察よりも確かだつて」

「キング?」

「このゲームは店がからむからね。君のお金についての約束はキングが保証人だ」
カランとマドラーで氷をかき混ぜて右生はグラスを差し出した。何度見ても手品のような手つきだ。

「もちろん、タダつて言っても四六時中なわけじゃない。それじゃこつちが困るからね。君は毎週水曜日に俺を指名できる。開店から閉店まで客としてここで遊べる。閉店後、翌日の開店前までは……俺の恋人になれる」

恋人ってどういうことなんだろう。

「期間は三ヶ月。決して延長はない。君は必ず水曜日にやってきて俺を指名すること。それが権利であり義務だ。あとはお互い楽しめばいいだけ」

「勝ち負けって、どうやって決めるの?」

それが肝心だ。でないと話がうま過ぎる。

急に彼の腕が伸び、その指が彩芽の髪に触れた。思わず退く身体。

「こないだ俺が言ったこと覚えてるか?」

忘れようつたって忘れられない言葉だ。

『気持ちじゃなくて、身体から恋を始められるかどうか。試してみれば?』

「……覚えてる」

「無理だつて言ったよな」

念を押すように聞いてくる彼にうなずく。

「それが勝負さ。身体から恋ができるかどうか。三ヶ月の間にそっちが俺に惚れれば俺の勝ち。惚れなければ君の勝ち」

「そんなことなの？ そんなの、気持ちなんてどうやって判断するの？」

「ここはホストクラブだからね。勝敗はレディ任せだ」
「つまり？」

「君が俺に『好き』と言うか、言わずに三ヶ月過ぎるか」

彩芽は信じられないという顔になる。それじゃどう考えても、女性が有利じゃないだろうか。

「三ヶ月過ぎて、君が勝てばお金は払う必要はない。ただし、ゲームも終了だから俺達はそれきり。店にも二度と来ないこと。それが条件」

右生は綺麗な笑みを浮かべて言う。

「その辺は俺のプライドもあるからさ」

それはそうだろう。自分だってそれから来る度胸はない。

「じゃあ、もしあたしが負けたら、お金の取られ損？」

右生がクスクス笑う。

「ここで遊ぶなら取られ損つてことはないと思うけど。どっちにしろ、君は俺と三ヶ月限定とはいえ恋人関係を楽しめるわけだし。俺の勝ちならそのあととも店に来てくれて構わない。ただし普通の指名客としてだけどね。でも優遇はするよ」

得なのか損なのか。頭がぐるぐるする。

「ものは考えようだ。今の君にとってその六百万つてのはあっても嬉しくない、でも捨てるには大金過ぎる。貯めるの大変だったんだろ。こないだ使い道を探してたよな。なら厄落しと思えば？ ろくでもない男への末練をふつきるための」

ムツとしながらもその時、彩芽の脳裏に浮かんだのは元彼からの最後の手紙だった。

『三ヶ月後に彼女と結婚するから』

流れる黒髪が目の前をかすめる。これは確かに未練だ。このゲームに乗れば三ヶ月後には全てを笑い飛ばせるようになるんだろうか、本当に？ 確かにこのままではあまりにも哀しい。自分も六百万円分の時間も。

考え込む彩芽をよそに、右生はカラカラとグラスを鳴らし玩あそんでいる。耳に光るピアスがほんとに綺麗だ。

「いつもこんなゲームをやってるの？」

彼ほどの人気ホストが。そんな疑問が浮かんだ。そうだ、さっきタカヤが。キングも。店がらみのゲームを彼らが知ってるのは当然かもしれないが。当の右生は涼しい顔だ。

「たまにね。そうだな、五回やったか」

「勝敗は？」

向けてきた眼でわかった。透明なガラスみたいに感情のない色。

「負けたことはない」

こんな条件で、それでも彼に「好き」って告白してるのか、みんな。言い換えればそれだけ彼が

魅力的ってことで。

彩芽は自らを危ぶんだ。身体から始まる恋があるなんて信じてない。信じてないけど、そう言いながらここまで説明を求めに来てる自分。もしかしたら？ 彩芽のためらいなど知らぬげに右生は続ける。

「三ヶ月もったことがない。みんな二ヶ月経たないうちに告こつてくれちゃってさ」

「金額って決まってるの？ いつも」

「いや。金はいあまり問題じゃないし。そういえば一桁上の奴もいたな」

驚愕きやうかくした。一千万賭けても？ どうしよう。それじゃホントにお金の取られ損？ でも、わかっててそうしてるのだ。前にゲームをやった人だって。

「あんまり早過ぎるのも悪いから。残り一ヶ月は指名客として優先して相手したんだけどね」
それで相殺さうさいになるとも思えないのに。

「この前はいつだったの？」

「五ヶ月経つかな」

「そんなに前？」

「もうやめようと思ってた」

「ならどうして」

「さあ」

組んだ足に頬杖をついて右生が彩芽を見る。

「負けず嫌いはそそるんだよね」

そそるのはあなたの眼でしょ、と突っ込みたかった。負けず嫌いでお金を持つてる女だから？ そんな理由で誘われてるの？

「気に入ったから」とか言われていたらやめたかもしれないなかった。自分が覚束ぼつぷかなくて。彼の読みは当たっていた。彩芽の性格は負けず嫌いで無鉄砲だ。どう考えてもこっちに分がありそうな条件なのに二ヶ月もたない、そういうシチュエーションに加えて、認めたくはなくても彼に惹かれていたから。気づいたら言ってしまったのだ。

「やるわ、そのゲーム」

右生がニヤツと笑った。獲物を射程内にとらえたヒヨウウの笑み。

「OK。なら今夜から君は俺の『ウエンスデーラバー』だ」

彩芽はすぐ後悔しかけた。右生の瞳の輝きが彩芽を怯おそえさせたのだ。何？ 何だろう？ その様子に気づいた彼はそれを隠して微笑む。

「待ってる。キングを呼んでくる」

「え」

席を外した右生は、奥から再びキングを連れて現れた。

「決めたんですか、彩芽さん」

キングはソファに座ると、言葉は穏やかに、しかし鋭い口調で確認してくる。

「あなたが勝てば結果としてゲーム期間中、右生を指名しての水曜日の来店は無料となります。負

ければ代金としてあなたから六百万、『マンホール』がいただきます。それでいいですか？」
やめるなら今だ。そう思うのにな何故か彩芽はうなずいてしまう。

「あの、契約書か何か？」

「いいえ、『マンホール』はお客様を信用しますよ」

「でも。それじゃもし、たとえば途中であたしがいなくなっちゃったりしたら」

並んだふたりがそろって笑う。つい見とれる。

「あなたも人がいいですね。確かにそうなる可能性もありますが、これまでそういうことはなかったですし、そんなことが万が一起きたとしても、店は痛くもかゆくもないんですよ」

「どうしてですか？」

「逃げなくても、あなたがゲームに勝てばこっちは損するわけでしょう？」

そう。だから不思議だったんだけど。

「仮にも店を使ってゲームで遊ぶわけですからね。何かトラブルがあった場合を含め、店への損失
その他は全て」

キングが右生を振り返る。

「彼が支払うわけです。借金になろうとね」

彩芽が眼を見開く。

「だからご心配には及びません」

キングも、右生も平然と微笑んでいる。背筋がゾクツとした。これは自分の知らない世界だ。わ

かっていたつもりだったけど。そこまで言っ腰を上げたキングが右生に尋ねる。

「今夜から始めるのか？」

「そのつもりだ。彩芽もいいか？」

「あ、うん」

「それと仕事だけど。フレックスタイムとかできるか？」

「フレックス？」

「言ったとおり、君は水曜日の夜から翌日の開店時間までの俺を独占できる。でも仕事があったら
難しいだろ？」

翌日の開店時間まで。『マンホール』は朝六時閉店。つまり木曜の早朝から日中がその時間にあ
たるわけで。そこまで考えてなかった。どうしよう。

「無理しなくてもいいけどね」

つくづく憎たらしい男だが、清水の舞台からダイブするのにいまさらびびってもしょうがない。

彩芽は舞台の高さをさらに上げることにした。

「わかった。木曜日、仕事休みにする」

「平気なのか？」

「もともとあたし派遣社員なの。強引だろうけど、やるって決めたから」

この性格が問題よね。でも、三ヶ月後の自分がどうなるかの瀬戸際だ。やるなら徹底してやらな
きゃと思う。

「勝負的にはさ、俺と接触が少ない方が有利かも」

「そんなのフェアじゃないでしょ。ちゃんと知った上で決めるわ。惚れるか惚れないか」

「なるほど」

クックツと笑う彼の声も耳に馴染みつつある。

「了解。手加減抜きでいいわけだ」

彼の眼が一段と危ない光を宿した。やっぱり無謀かな。彩芽の逡巡を許さぬように右生はその場で立ち上がった。

「紳士淑女諸君」

響く声にフロア中の人がこつちを向く。ホストもお客も。

「久しぶりにゲームが始まる。一緒に楽しんでくれると嬉しいね」

あちこちからホウと息が漏れる。みんなゲームのことを知ってるらしい。右生が恭しく手をさしのべるので、彩芽はわけもわからずにつられて立ち上がった。

「彼女が今回の『ウエンスデーラバー』、彩芽だ」

パラパラと拍手が起きた。何？ これは一体？ まるでお芝居でも上演するみたいじゃない。

「じゃ、彩芽」

名前を呼ばれて振り向くと、すぐそこに右生の顔。

「ゲームスタートだ。……グッドラック」

いきなりキスされてしまった。軽い挨拶のような、でも紛れもなく唇へのキス。こんなたたくさん

の人の注目の中で？

あまりにも刺激が強すぎて、唇が離れるや否や、ソファにペタンと座り込んだ彩芽は顔を覆ってしまう。頬が燃える。周りがどんな反応だったのかわかるわけもない。

そう、彩芽にはわかってないことがたくさんあった。ゲームの開始が告げられても尚。

そのあと、彩芽は『マンホール』での時間を楽しんだ。ごく普通の態度でホストとして接する右生。指名されて席を外す時は、ヘルプが来てくれる。まだ顔の覚えきれないたたくさんのホスト達。ミチアキ。ナル。マサシ。ここに来るのはまだ二度目。知らないことだらけだから目新しさに夢中で。

『閉店後、翌日の開店時間までは恋人として』

その意味をはっきり悟ったのは、店が終わってからだった。

夜明けが早い夏の太陽がとうに昇っている中、右生はタクシーをつかまえると彩芽を促した。連れてこられた場所は見覚えがありすぎた。こないだの高級ホテルでルームナンバーも同じだ。カードキーでドアを開けた右生が振り返る。後ろで彩芽は顔を強張らせていた。気づかぬうちに。

「そんな怖い顔するもんじゃないって」

背中を押されるように招き入れられた部屋。オートロックのドアが閉まる音は細く、でも確かに耳に残って、『マンホール』という異次元からまた別の異次元へと隔離されたのを彩芽に実感させた。「ふたりだけ」という異次元。

彩芽をドアのそばに置いたまま、右生は窓へと近寄るとシャツとカーテンを閉めた。すでに昇つ

ている太陽の攻撃を遮る^{おさえ}みたい。そうだ。あの朝もカーテンは閉め切つてあつたっけ。彼の腕の中で眼を覚まして最初に見た光景を彩芽は思い出す。

外はすでに暑かつたけれど、空調が整えられているホテルの中は、それを感じさせない室温だ。角部屋のここは、四つの辺のうち二辺に大きな窓が設けられている。右生はその両方のカーテンを閉めると、勝手知つたる様子で冷蔵庫から水を取り出して口に含んだ。

「ここ、前と同じ部屋だよね」

やつと口から漏れた言葉に、右生が彩芽を振り向く。

「そう。この先もふたりで過ごすのはここになる」

「この部屋、借りてるの？ いつも？」

「まあね。後々のこともあるから、お互いのプライバシーには踏み込むのも踏み込まれるのもいやだろ？ ここならどつちでもない」

「高そう」

部屋を見回して彩芽はため息をつく。

「これもゲームの代金に入るの？」

「いや、ここは俺が勝手に使えるんだ。特別なのさ」

右生はこの部屋についてそれ以上説明しなかった。したくなかつたのかもしれない。また水を含む彼を見ていたら、彩芽も喉^{のど}が渴いてきた。ついさっきまでお酒を飲んでいたせいもある。もつとも前回の教訓でセーブしてはいたが。

「あたしももらつていい？」

カーテンを閉めた窓の横で椅子にふんぞり返っている右生に、もう一度声をかける。

「いいよ。こつち」

呼ばれて彩芽はキョトンとした。冷蔵庫はあつちなのに、右生は座つたまま手をさしのべている。

彩芽は何故か彼の手に弱く、またその自覚も学習能力・現状認識能力も足りなかつた。預けた手を引かれると、反対の手が胸を絡め取り、そのまま膝の上に乗せられてしまう。

「ゆっ、右生？」

「ん？」

何の不思議もないという表情が至近距離。

「あの」

「水だろ」

有無を言わず下りてきた唇が水を口移しにしてきた。飲み干す以外に何もできない。口移しはすぐ深いキスに変わった。「恋人として独占する」。その意味を知る。イヤと言うほど。実は二度目らしいが、最初の夜について彩芽の記憶は曖昧^{あいまい}で途切れ途切れだ。はっきりした意識での彼とのセックスはこれが初めてだった。

今までの恋はどれも淡いものばかり。高三で好きになった人と結婚まで夢見たのが一番現実的だった。その人とは四年つきあって、もちろんセックスだつてしてる。逆に言うど気持ち^{しんもち}が伴わない肉体関係なんて、結んだことも望んだこともなかつた。自分がここにいることが信じられない、と